

開催地名	東京都 小金井市
開催日時	令和7年2月18日(火)19:00~20:30
開催場所	小金井市市民会館「萌え木ホール」
語り部	石川 善憲(茨城県日立市)
参加者	36名(22団体)
開催経緯	<p>当市では、市内自主防災組織(31組織)を対象とした防災講習会を毎年実施している。自主防災組織の現状として、若い世代を含めた地域住民同士の連携や活動を継続していくための仕組みづくり(役割分担や負担軽減の工夫)が課題となっている背景も踏まえ、今年度は関心が高まっている避難所運営をテーマとした経験談を通じて、各組織の今後の活動に繋げていただくことを目的として開催した。</p>
内容	<p>(1) はじめに 本プロジェクトでは、東日本大震災時に茨城県日立市久慈中学校の校長として避難所対応を行った語り部が、自身の経験をもとに講演を実施した。現在も久慈学区のコミュニティ推進会の会長として、防災をはじめとした様々な地域活動に取り組んでいる。今回の講演では、震災当時の避難所運営の実態や、日頃の備えの重要性について具体的な事例を交えながら語られた。</p> <p>(2) あの日のこと 津波発生と避難所の対応 東日本大震災では、津波が町を越えて押し寄せ、大規模な被害をもたらした。震災当時、語り部は久慈中学校の校長として避難所の運営にあたった。震災前は津波の襲来を具体的に想定しておらず、防災意識が十分ではなかったと語る。しかし、実際に津波が発生すると、日立港では約1,400台の車両が燃える大規模火災が発生し、町全体が壊滅的な被害を受けた。 震災発生時、久慈中学校では、揺れが続く中で「教室待機」とのアナウンスを出したが、その後も揺れが続いたため、避難開始のアナウンスが遅れた。校舎の耐震性も不安視される中、避難者の車両を校庭に受け入れる決断をし、教員の半数を駐車場の整理にあてた。これにより、車の出入りがスムーズに行われ、避難所全体の秩序が保たれた。事前の防災訓練で類似の訓練を行っていたことが、この対応の成功につながった。 その後、大津波警報が発令され、町の270世帯が床上浸水の被害を受けた。津波は単なる海水ではなく、海底のヘドロを含んだ泥水となって町に押し寄せ、波が引いた後には20cm以上の泥が堆積し、乾燥すると大量の粉塵が舞った。これにより、車両の移動が困難となり、復旧作業にも影響を及ぼした。 避難所には毛布や水、食料の備蓄が一切なく、防災無線で断水の情報が流れると、学校のプールがないため、市のプールに水を汲みに行く必要があった。明るい時間帯には、中学生が中心となりテントを設営し、1000人以上の避難者を受け入れた。電源車が運び込まれ、ストーブや携帯の充電が可能となったが、電波塔が損傷していたため、携帯電話の通信は途絶えていた。家族間での安否確認の手段が限られていたため、事前に避難場所を決めておくことの重要性が痛感された。</p> <p>避難所での生活と住民の協力 避難所では、必要物資の不足が深刻であった。そのため、学校のリアカーを利用して地域の家庭から毛布を集め、高齢者や子どもを優先して配布した。しかし、供給が追いつかず、中高生が発案し、毛布を公平に配るための整理券を配布する工夫を行った。このような子どもたちの柔軟な対応が、避難所運営の助けとなった。 さらに、港町の特性を活かし、地域の人々と協力して、大釜を校庭に運び込み、震災当日の夕方から炊き出しを開始した。近隣の飲食店や住民から刻んだ野菜や食料品が提供され、新潟からは炊いた米が届けられるなど、助け合いの精神が随所に見られた。学生たちも積極的に配膳を担当し、避難所の食料供給を支えた。 また、学校では生徒の安否確認を徹底し、確実に親へ引き渡す体制を整えた。安否確認の電話がひっきりなしにかかる中で、教員が電話対応を行い、無線で体育館に情報を伝え、学生が呼び出しを担当した。安否確認が取れなかった場合は、掲示板に情報を掲示する対応も実施された。</p>

トイレ問題も深刻で、断水により詰まりが発生したが、中高生が自主的にトイレの詰まりを取り除き、避難所の環境維持に貢献した。さらに、避難所では中高生が小さな子どもたちに読み聞かせをする姿も見られ、避難者同士の交流が生まれていた。
震災発生から4日後には行政が支援に入り、学生のボランティア活動は終了した。

(3) その後の取り組み

震災後、久慈中学校の避難所運営の様子は道徳の教科書に掲載されるなど、全国的に注目された。語り部は、災害発生前の事前の想定がいかに重要であるかを改めて実感し、その後も地域で防災活動を推進している。

久慈町では、地域と学校の協力体制が強固だったことが、避難所運営の成功につながった。そのため、防災訓練を従来の10月開催から台風シーズン前へと変更し、実践的な訓練を行うようになった。特に、防災訓練をより多くの人に参加してもらうため、靴作りワークショップを取り入れるなど、楽しみながら学べる工夫を凝らしている。また、防災街歩きを実施し、マンホールの隆起など危険箇所を点検し、マップにまとめてHPに掲載する活動も進めている。

(4) まとめ

防災は、日頃から災害を想定し、具体的な行動計画を立てておくことが重要である。震災時には、防災無線が大きな役割を果たし、事前の情報共有の重要性が再認識された。また、避難所運営においては、学生が自主的に参加し、役割を担うことで、より円滑に運営できることが明らかとなった。

避難所運営は、地域の防災部だけでなく、動ける人が積極的に関与することが求められる。そして、日頃から地域と学校が良好な関係を築き、住民同士が協力し合うことが、いざという時に強い街づくりにつながる。防災は、単なる準備ではなく、地域の結束を高める活動でもある。これからも地域と共に、より良い防災体制の構築に努めていくことが大切である。



開催地より

災害特性の違い(津波被害)はあったものの、被災後の避難所生活とその運営という点では、共通する内容であったため大変勉強になった。特に、避難所運営はもちろん平時からの学校と地域との関わり方や体制づくり等についてお話しいただいたことで、参加者の防災意識向上に繋がったと感じる。